

九（承前）

数分後

わずかに髪を濡らした彰子が、雅美を伴って寝室に戻ってくる。言い付けられたとおりに彼女の両手には手錠が掛けられたままであった。

宗方が雅美に命じる。

「そこに座りなさい」

彼女が床に腰を下ろすと、宗方が彰子に視線を向ける。

「風呂が沸くまで時間があるな」

その言葉と向けられた視線に、彰子が不安を覚える。

「……なんですの……？」

「身体を洗ってきたのか？」

「え……」

「髪が濡れている」

「……はい。お風呂に火を入れるときに、少し……」

「何故だ？」

「……」

宗方が腰を下ろしていたベッドから立ち上がり、彰子に近づく。

「いや、なにを……」

宗方に抱きしめられた彰子が、驚いたような声をあげ、掴まれた手を振り払うように身体を逸らす。しかし彼は彰子を強く引き寄せ、その腕の中に捉える。

「どうして、冷たい水まで使って身体を清めてきた？」

「……それは」

宗方の手が、彰子の乳房と尻を撫でまわしはじめる。

「止めて……」

彰子が顔を背け、宗方の胸から逃れようともがくが、それを難なく封じ込められ、唇を奪われ

る。

「望みどおり抱いてやるぞ、彰子」

「駄目、駄目です。お願い貴方、およしになって」

宗方の瞳を見返す彰子が、宗方の言葉がまぎれもなく本気である事を悟り、狼狽の表情を浮かべる。

「言葉とは不自由なものだ」

宗方が、彰子を両手で突きベッドの上に押し倒す。

「貴方、お願いです。こんな、こんな、雅美の前でなんて、そんな惨い事……」

「望んだのはお前じゃないのか。どうしても嫌と言うのなら、縛り上げて鞭で打ち据えてから無理矢理に犯してやるるか？ 血まみれの尻を欲情に振るお前の姿を、この雅美に見せてやるのも一興かもしれないぞ」

「いやっ、それだけはおよしになって！」

彰子は、宗方が今言った事を実行する事を一瞬たりとも疑わなかった。血の気が引いて行くのを感じ、顔を伏せる。

「選んだ彰子。おとなしく抱かれるか？ それとも縛り上げられて鞭打たれながら、抱かれるか？」

彰子は顔を伏せたまま、肩を震わせる。しかし、顔を上げたときにはそこに、諦めと、そして幾許かの欲情とがあった。

「わかりました……。お抱きになって下さい……」

宗方が薄笑いを浮かべる。

床に腰を下ろした雅美は、そんな2人のやり取りを茫然とした表情で見詰めていた。

現実には我が身に起っている事とはいえ、あまりに急激に進行する様々な事柄が、精神に過負荷となつて、まるで現実感を伴わない白日夢の中の出来事のように思える。

そんな彼女の視線の中で、宗方が彰子の上におおいかぶさつて唇を吸い、服の裾に手を差し込む。彰子と宗方の身体と舌が絡まりあい、下穿きの中に潜り込んだ指が蠢きはじめると彰子の手が宗方の背を掴む。

宗方が彰子を、重ねた身体の上から見詰める。だがその視線は彼女を直接に見てはいない。

「嫉妬……か」

独白のように呟いた宗方が、彰子の秘部を探り当てる。

「ああっ」

彰子が短く声を上げ、指が肉襞をかき分けながらその奥に潜り込むと、その顔に屈服の表情が浮かんだ。

それは、最初からそこに用意されていたものであった。

宗方の指に、膾口から滲みだしたぬめりが触れる。

彰子が身体を反らし、漏らした低い声が雅美に聞える。その声に彼女は我にかえり、正気を取り戻した者の目で宗方と彼女を見詰める。目前で重なり合う男と女の姿、それは異様なものであり、又蠱惑的なものであった。

宗方が、彰子の裾に手を差し入れる。雅美の目に、乱れた裾から覗く彰子の太股の白さが突き刺さり、その手が太股をはい上り、そしてその奥をまさぐる指の動きを見せつける。

宗方が、彰子の服の裾を大きくめくり上げ、下穿きを取り去る。

振り返った宗方の目に、雅美が目を伏せた。

「目を逸らすな。見るんだ」

激しい調子の声に雅美がびくりと震え、顔を上げる。

ベッドの上の宗方が、彰子と身体を入れ替え、そして自分の下半身に彰子を跨らせる。下穿きを取り去られ、裾をめぐり上げられ、脚を開かされた格好の彼女の下腹部は、その痴態を雅美の目にさらけだす。

「ああ……、見ないで雅美ちゃん……」

彰子が、恥辱の涙を溜めて火照る顔を逸らす。しかし、大きく開かれた股の間に差し込まれている宗方の手が愛撫に動く、彼女は快楽に表情を歪ませる。

淫らな指使いのまま宗方が、上半身を起し彰子の背中を抱きながら、その肩越しに雅美を見る。

「見えるか雅美、彰子の秘部が喜びの糸を引いているのが」

宗方が、彰子の脚を上に乗せている下肢に力を入れ、彰子の両脚を押し上げる。その動きにつれて更に彰子の両脚は開き、太股の奥で指に觸られている秘部が、克明に雅美の視線にさらされる。

宗方が、揃えた人差し指と中指を彰子の膾口に押しつける。雅美には、きつちりと窄まった彰子の膾には、到底その指を受む入れる事が出来ないように思えたその瞬間、膾口が押し開かれるように大きく広がり、その内部に宗方の指を受む入れていく。

驚きの表情を浮べて彰子の股間を見る雅美に、宗方が視線を向け、彰子の膾に挿入した指を下に動かしはじめる。

彰子は、苦痛とも快楽ともつかぬ声を断続的に上げながら、自分の内部から欲情を引きずり出していく彼の指を膾で感じ取り、身体の奥から湧きあがってくる、どうしようもない欲情を意識する。

もう駄目だ、もう私は雅美にあわれもない姿を晒してしまっ……。

でも、私はそれを望んでいたのか？

先ほどの宗方の言葉が蘇る。

——「嫉妬……か」——

彰子が肉の衝動に屈伏する。

そしてその屈伏は彼女の中でぐつぐつと沸き立ちはじめていた肉欲を一気に開放し、彰子はそれを開放感とともに受け入れる。

彰子が、こらえていた快樂の声を上げる。

雅美は、まるで別の一匹の動物のように彰子の膣が宗方の指を啜え込む光景を見る。愛液に濡れた指が膣の中で蠢き、その動きが肉襞を淫らによじらせる。

宗方が、快樂に身体を震わせる彰子の首筋に舌を這わせ、耳に囁く。

「欲しいか？」

彰子が反射的に肯く。

宗方は膣に挿入した指の動きを緩やかにして、尖りを見せはじめている陰核に親指を当てその腹で捏ね回す。

「はつきりと雅美にも聞えるように言うんだ」

躊躇する彰子が激しく身をよじらせ、そして一筋の涙とともに哀願の声を漏らす。

「は、はい、欲しいです、貴方のものが……欲しいです」

雅美は、その言葉を聞いた瞬間、耐え切れずに顔を伏せる。手錠に両手を繋がれてさえないなければ彼女は耳を塞ぎ、彰子の声を聞くことを拒んだであろう、しかし容赦なく上がる欲情の声は彼女の耳にとどき、身体に染み込んでいく。

雅美の耳に、宗方がスポンのベルトを外す時の音が聞える。そして彰子の一際大きな喘ぎの声。ベッドの軋む音と、男と女の快樂の息遣い、そして濡れた粘膜の立てる淫らな音のくり返し。

雅美は、自分でも気付かぬうちに涙を流す。

「顔を上げろ、雅美」

宗方がうつむく雅美に叫ぶ。

「見るんだ、喜びに身体を震わせる女の姿を、辱められる事に快樂を見出す女の姿を、雅美！」
雅美が顔を上げる。

大きく脚を広げられた格好で宗方の下腹部に跨り、下から突き上げられる陰茎を受け入れた女の秘めた箇所を剥き出しにされた彰子の姿。瞳を半ば閉じ、濡れて紅く光る唇からは快樂の喘ぎを止めなく紡ぎだし、身体を自ら上下に振り、快樂を貪るその姿。

更に宗方は、雅美に見せつけるように彰子の下肢を大きく開き、腰を強く上下に振る。彰子の喘ぎの声がいっそう激しくなり、表情が歪む。

宗方が彰子の胸元をはだけ、片方の乳房を剥き出しにする。そしてその頂点で起立した乳首を後ろから回した手で摘まみ上げ、捻り上げるかのように強く捏ね回す。

彰子の声に、すすり泣く声が混ざりはじめる。

宗方が腰の動きを急に止める。彰子が悲鳴にも似た声を上げ、宗方に寄り掛かっていた身体を

起し、膝をベッドに付き、自分から激しく腰を上下に振り始める。

彰子のべつとりと濡れ、乱れ切った秘部に、その愛液にまれた陰茎が出し入れされる光景が、雅美の目に食い入る。

眺める、その彰子の信じられない姿を驚きの表情で見詰め、その雅美を宗方が彰子の背後から眺める。

彰子の腰の動きに、捏ね回すような、押し付けるような動きが加わり、手が、もう片方の乳房をひきだし、自らの乳首を愛撫しはじめる。

腰の動きが早くなる。

彰子の声がせつぱつまつたものとなり、そして、雅美にはとても彼女が上げる事ができるとは思えないような声を絞り出し、がくりと首を垂れる。

宗方は、彰子の力の抜けた身体をベッドの上に退け、射精の衝動に耐え切った陰茎を彼女の股間から抜き出す。その瞬間彰子は小さく身体を痙攣させ、膣からこぼれおちた愛液がシーツに垂れ下った。

ベッドに彰子を残し、宗方は雅美に近付く。そして彰子の激しいよがりによつて乱れた衣服を整えようともせずに雅美の顎に手を掛け、上を向かせる。

「風呂も沸いただろう、行こうか、雅美」

宗方が薄笑いを浮かべ、雅美が身体を震わせ、そしてベッドの上の彰子が、か細いすすり泣きの声を上げた。

宗方が、風呂場の脱衣所に両手を手錠に拘束されたままの雅美を立たせ、はさみを取った。

「動くなよ、身体を切ってしまうからな」

先程からのショッキングな出来事によつて、正常な思考を奪い取られた雅美は、ただ微かに湿り気の残る床に立ちつくし、その瞳を閉じる。

鋏の刃の金属の冷たい感触が肌に触れたとき、彼女はびくりと身体を震わせた。

刃が、その狭間に、雅美の最後の守りである小さな布を挟み込み、そしてゆつくりと切り裂いていく。

宗方は徐々にあらわになっていく彼女の裸体を楽しむかのように、ゆつくりとその作業をつづけ、切り取った断片を床に落して行く。程なく彼女は全裸を宗方の目に晒し、身体をその視線から守るように身を窄める。

宗方が片手で、彼女の手錠に繋がれた両手首を掴み、無理矢理に持ち上げ、まだ完全には成熟しきっていない乳房に触れる。

恥ずかしさに顔を染める雅美を見詰め、乳房を充分に摩り上げておいてから、乳首に触れる。

愛撫される雅美が、息ともつかぬ低い声を上げ、その身体から力が抜いていく。宗方は更に力を緩め、両方の乳房をなでさすり、乳首を執拗に愛撫しつづける。いつしか雅美の両手はだらりとたれ、宗方の背中に触れる。乳首が固くなった。

宗方が、恥ずかしさとは違った意味で頬を染めはじめている雅美に囁く。

「先に入りなさい、すぐに行くから」

そして言葉を切り、彼女の瞳を覗きこむ。

「いいね?」

雅美が、ごく小さく肯きを返す。

雅美が不自由な手で湯船の湯を使い、身体を流した頃、宗方が風呂場に入って来た。

初めて見る男の全裸に、視線を逸らす彼女を、宗方が両手で抱き、まだ線にか細さを残す彼女の柔らかな身体の手触りを楽しみなから、薄く香るような髪の毛の匂いを吸いこむ。

宗方は雅美を促し、湯船に入る。

宗方と差し向かいの格好で、湯船の中に座った雅美は、湯の暖かさと、先程からどうしようもない程に感じている身体の火照りとに、深い溜め息をつき、虚脱感にも似たぼんやりとした気分を味わう。

宗方が、雅美の湯に濡れたうなじに触れ、ゆつくりと肩まで撫で下ろし、顔を近づけていく。

雅美は自然に瞳を閉じ、彼の口付を受ける。

「立って」

宗方が、雅美の肩を抱いたまま、その耳に囁く。

雅美は湯を波立てながら立ち上がり、宗方の目前にその下腹部をさらす。

宗方はそんな彼女の、薄く煙るような湯に濡れた陰毛をかき分ける。ぴったりと閉じられた少女のものといつて良い肉の合せ目が見え、その肌色をした柔らかな部分に、彼は軽く唇に触れさせてから、その狭間に指先を触れさす。

宗方が、雅美の股間の合せ目に浅く差入れた指を、すつと上に向けてすべらせる。

「あつ……」

雅美が低い声を上げ、その合せ目は指の動きとともにわずかな内側の桜色を覗かせてから、窄まりを取り戻す。

「脚を開いて」

宗方が囁く。

雅美が再び湯を揺らし、太股を開く。その動きにつれて目の前の蕾が開き、頂点に、陰毛をまとわりつかせている桜色をした肉の芽が覗く。

宗方は、両手で陰核の回りの柔らかな肉を押し広げ、包皮に包まれた艶やかな肉の突起を剥き

出しにする。

雅美が陰核に舌先を感じる。

舌が動き、柔らかく弾くように刺激されると、反射的に太股が小さく痙攣し、息が漏れてしまう。上の寝室で、その箇所を舐められたときは違った快楽に、彼女は喘ぎの息を吐き、それとともに、舌によって愛撫される陰核が持ち上がり、固くなっていく。

宗方は、指先で窄まった膣口の周辺に触れ、滲み出しはじめて愛液のぬめりをすくい取る。顔を下腹部から離し、指の間で糸を引く愛液を雅美に見せる。

「ほら、もうこんなに濡れている」

「いや……」

雅美が視線をそらし、宗方の愛液に濡れた指で、勃起した陰核を軽くつまみ上げられると、彼女はその快感に声を上げ、その声が、陰核をゆつくりと揉むように愛撫されるにつれ、喘ぎとなっていく。

宗方が、その雅美の表情を楽しみながら囁く。

「一人ですると、こうされるとどっちがいい？」

雅美が頭を振り、答えを洩ると、宗方が、陰核をつまむ指の動きを更に小さくする。無意識のうちに雅美の腰が揺れる。

「どっちだい？」

重ねて問われたとき、雅美が熱い息とともに囁く。

「今の方が……」

宗方が、指の動きを少しだけ強める。

「聞えなかったよ、もう一度」

雅美が、はつきりとした喘ぎ声を上げる

「あぁっ……。今の方が、今の方が気持ちいいです、自分でする時よりもずっと……」

雅美の言葉に満足げな笑みを浮べた宗方が、彼女の陰核の包皮をずり下げる。

びくりと太股が震え、宗方の舌が、剥き出しにされた陰核に触れる。舌が蠢き、痛みにも似た快楽が生じ、彼女は喘ぎの声を漏らす。

その声は、既に少女のものではなかった。

細かく身体を震わせつづける雅美が、初めて他人の手によって絶頂を味わされる瞬間が近づく。そのほんの一瞬前、宗方が、膣口から流れ出す愛液に濡れた顔を、彼女の股間から離し、落胆の喘ぎを引き出す。

「お尻を見せてっらん」

「……お尻？」

そう聞き返す彼女の声は、はっきりと欲情にかすれている。

「そうだ、後ろを向いて……」

雅美が身体を回し、尻を宗方に向ける。湯から立ちあがる彼女の小振りな尻が、その前に座り込んだ宗方の目前に晒される。

腰の細いくびれから優雅で急な曲線を描き、盛り上がるその尻を彼は見詰め、両手で触れる。二つの白い尻房を揉み上げ、張りつめた弾力を手の中で確かめる。

「脚を開いて」

命じられたとおりに開かれた太股の、その上の尻の狭間から秘部と後孔が覗く。

宗方が雅美の小さく窄まった後孔に指を触れる。

「あつ、そんなところ……」

驚いた声を彼女は上げたが、身を引こうとはしない。

宗方が薄い笑みをうかべる。

「私と彰子の夜の声を聞いているなら知っているだろう、彰子がここでも気持ちよくなれる事かな……」

宗方が、雅美の後孔に当てた指を、内側に揉み込むように動かすと、彼女の唇から息が漏れだし、愛撫される後孔がゆっくりとほぐれはじめる。

「ほら、柔らかくなってきた……。ここも随分と一人で勉強したらしいな」

宗方が囁きながら、もう片方の手で前方の秘部をまさぐる。

柔らかく盛り上がる二枚の肉襞の狭間に、隠れるように息衝く肉の尖りを指の腹でこね回し、膣口の周辺をなせる。

雅美が中断されていた秘部への愛撫に喜びの声を上げると、膣口をまさぐる指が再び愛液にぬめる。

後孔を愛撫する指が、雅美の中に潜り込む。ごく浅いその挿入に彼女が驚き声を上げ、息を詰める。秘めた窄まりの筋肉が指を締め付けてくる。しかし、後孔に差し入れた指を細かく動かし、同時に秘部への愛撫を強めると、その締め付けもやわらかく緩んでいく。

両方の指を淫らに動かしながら、宗方が囁く。

「いく時は言うんだ」

雅美が、宗方の二つの指によって引き出された快感に激しい息を吐きながらうなずく。すぐに彼女の太股は細かく痙攣しはじめ、息が切羽詰ったものとなる。

その息遣いを貫き通すように雅美が叫ぶ。

「……あつ、もうすぐです、もうすぐにつー！」

その言葉を聞いた瞬間、宗方が秘部への愛撫を再び止める。そして後孔の中に挿入している指を前後に動かし、絶頂の間際にある彼女の身体に、尻の快楽を刻みこむ。

彼女は中断された快樂にすすり泣き、手錠に繋がれたままの手を股間に持つていこうとする。しかし宗方はその腕を押え、尻への愛撫をさらに強める。

雅美は泣き、身体を抵抗に震わせる。しかしその奥底から、別種の快樂が生じはじめる。その快樂は鈍く、そして切なさを伴ったものであったが、一旦、その存在を意識してしまうと、急に大きく膨れ上がっていく。

雅美は我知らずのうちに大きな叫びを上げ、そして瞳を固く閉じる。

暗く閉じられた視野の中で、尻からの快樂が蠢き、そして激しくなる。宗方の指で愛撫される尻の浅い部分が形容しようのない奇異な感觸を生み出し、愛撫を懇願する臍口と陰核が熱く疼き、痛い程に乳首が尖っているのを感じる。膝がぐくぐくと揺れ、湯よりも熱いしたりが太股を這う。喉の奥からは、激しい息と声とが混じりあったものが生まれ、激しい連続した喘ぎとなり唇からほとぼしる。固く閉じた瞳の奥で赤い光がきらめき、そして彼女は激しく大きく全身をよじり、喜びの声を張り上げながら絶頂をむかえる。

ぐったりと倒れかかってきた雅美の身体を宗方が受け止め、そして湯船の中に座らせる。

宗方が、まだ尻の快樂の余韻を漂わせる雅美の瞳の前に立つと、彼女はまだ焦点の定まらない瞳で目の張り詰めた陰莖を見る。

雅美は命じられるのを待つ事もなく、それを口にふくむ。

宗方は、自分の下腹部で揺れる顔を見下ろしながら、先程二階の寝室で教えた口での技巧を、彼女が実行しはじめるのを見下ろし、充分にその味わいを楽しんだ後、彼女の頬に手を触れる。

「もういい、暑くなつて来たな、湯船から出よう」

雅美が宗方の陰莖を口に含んだまま視線を上げ、肯く。

湯船から上がった宗方は、雅美に洗場に這う姿勢になる事を命じる。

彼女が手足をつくと、宗方がつづけて言う。

「肘を付いて、尻を持ち上げるんだ」

彼女は逆らおうともせず、求められた姿勢になり尻を掲げる。

「脚を開いて」

雅美が膝を洗場にすべらせ、下肢を割り開く。

宗方は、そんな彼女の背後に立ち、尻の狭間からのぞいた、2つの女の秘めた箇所を見詰めながら、彰子が愛用する薔薇の香りの石鹸を取る。

「ひっ……」

雅美が、尻に宗方の手が触れるのを感じ、声を上げる。

宗方は石鹸をまぶした手で彼女の尻房をなで回し、そのぬめりと薔薇の花の香りを塗り付けて

いく。手が尻の狭間に入り込み、複雑な形状をした二つの肉孔を捉え、その箇所にも丹念に細かい泡をまぶしていく。

雅美は、二つの個所で彼の指の動きを感じる。

先程尻を舐めながら達した絶頂の記憶が身体に蘇り、石鹼によってなめらかに動く手指が、その記憶を助長する。

彼女の身体の変化を感じ取った宗方が、じつくりとその個所を背後から舐るべく、洗場に腰を下ろし、目の前に開陳される開かれた尻と、その狭間の二つの窄まりに、昂ぶった視線を向ける。

宗方は、石鹼でぬめる指で、彼女の秘部の二つの襞に触れ、桜色をした繊細な粘膜をつまみあげるようにして左右に開く。白い石鹼の泡が愛液を真似て膣口の窄まりに絡みつき、その奥のつやつやとした桜色の肉に囲まれた内部を覗かせる。更に押し開くと、窄まりの上で微かにその存在を見せる尿道口が、横長に窄まる。

食い入るように処女の秘めたる器官を見詰める彼の視線の中で、彼女の膣口がひきつくように蠢き、窄まりを回復する。宗方が欲情をあらわにし、精一杯に突起する陰核を指でつまむと、秘部の上で後孔が、彼を誘うかのように蠢いた。

宗方は、石鹼に塗まみれた指の腹で彼女の後孔の表面をなぞる。

すぐに彼女は反応をかせし、その筋肉の輪が窄まりをほぐしはじめる。

宗方は、後孔の筋肉の柔らかさの中にこく浅く、指先を潜りこませる。そしてその指先を回すようにして、内部を刺激すると、彼女の秘部からは白濁した濃い愛液の粒が膨れ上る。

秘部からの雌の香りが強くなる。

「もつと奥の方をまさぐってほしいか？」

「……はい」

その返す返事の淫らさにも気付かぬままに、雅美が答える。

宗方が、ゆつくりと彼女の肉壁をこすり上げながら、中指を深く潜りこませていく。その感触に彼女は声を上げ、後孔を引き絞るように窄める。宗方はその強い締付けを指で味わいながら、更に奥を犯していく。

中指の根元までを腹の中に受け入れた雅美が、低く押し殺したすすり泣く声を上げはじめる。

指が雅美の腹の中で蠢き、更に奇異な快樂を引き出していく。

宗方が曲げた人差指を、中指が埋没した後孔に押し付ける。

尻に別の指の感触を感じた雅美が囁く。

「あつ、無理です……二つもなんて」

「息を大きく吐いて、お尻の力を抜いてごらん……。大丈夫だから」

宗方が、人差指の先端を後孔に押し入れていく。

「だめ、だめです……きつい……」

雅美がうめくように呟き、腰を引こうとするが、宗方は逃げようとする雅美の尻を押え、ゆっくりと、しかし確実に二本の指を彼女の体内に押し込んでいく。

宗方の指が強い窄まりの抵抗を切り開くように進み、彼女は先程の宗方の言葉どおりに、大きく息を吐く。

宗方の感じる締り付けがわずかに緩み、一気に指が後孔に挿入される。

宗方は二本の指を咥え込む彼女の尻を背後から眺め、その猟奇的とも見える光景に欲情を深め、更にその二本の指を左右に開くようにして動かすはじめる。

雅美がまたも大きく息を吐きだし、耐えると、後孔が指によってわずかに開き、その内側の暗色を覗かせる。

宗方は、指に感じる分厚い肉の感触を味わい、よじり合されたゴムのような後孔の抵抗感を楽しむ。

揃えた二本の指を前後に動かすはじめると、雅美の尻がそれにつれて揺れる。その尻の動きを押し止め、宗方は、腹の内部を指でまさぐられる感触を彼女に教え込む。

雅美の息が荒くなり、うめくように変化した時、宗方は後孔から指を抜きさる。

石鹸のぬめりに塗れた彼女の後孔は、暫くのあいだ開いたままとなり、そしてゆっくりと窄まっていた。

宗方は湯船から湯をすくい取り、欲情に滾る彼女の尻に浴びせかける。湯が石鹸のぬめりを洗い流し、花の香りを際立たせる。

宗方は手を洗い、石鹸と愛液を取り去った後、彼女の尻房に両手を掛け、大きく左右に開く。

その宗方の力に雅美が前屈みとなり、洗場に肩を押し付けられる。

宗方は、腰を高く掲げ、極端な前屈みの姿勢で女の全てをむきだしにする雅美の尻を更に強く引き裂くように開き、その狭間の奥に秘められた淡い肉の造りまでをも、あらわにする。

厚い肉の半球の狭間で、極端に左右に引かれた秘部と後孔が、粘膜の張りを見せながら、その奥までを覗かせる。

宗方が尻の狭間に顔を近づけ、後孔の表面に舌を這わす。

雅美が、おののくような声を上げる。

「そんな事……ああ、そんな事……」

雅美は後孔に宗方の舌の動きを感じ、恐れにも似た感情を抱く。自分の主人であり、社会的にも高い地位にいる宗方が、ただの使用人である自分の後孔に舌を這わせているのだ。雅美はあまりに背德的なその行為に身を震わせ、そして激しい欲情に囚われる。

宗方は顔を押し付けるようにして、その行為をつづけ、舌尖を後孔に分け入らせる。

雅美が欲情の熱い息を吐き、快楽によがる。

宗方の舌が後孔から離れた時、彼女は消え去った快楽に、軽い虚脱感を覚えた。

宗方が雅美の背中に聞く。

「次はどうして欲しい？」

掠れた声で雅美が囁く。

「旦那様のもので……して……下さい」

宗方が、その彼女の途切れ途切れの言葉に下腹部に強い昂ぶりを感じ、自分を焦らすかのよう
に言葉をつづける。

「どこをだい？」

「……」

「雅美のどこをだい？」

「……お尻、お尻を……」

「お尻をどうして欲しいんだ？」

「……犯して……下さい」

宗方が、勃起しきった陰茎に石鹼を塗り付けはじめる。

宗方が、石鹼と尿道から滲みだした粘液にぬめる亀頭を雅美の後孔に触れさせる。

「いいか？」

宗方が昂ぶった声で雅美に問う。

「はい……」

雅美が答える。その声は彼以上に昂ぶったものであった。

宗方が、雅美の腰のくびれを両手で掴み、固く張り詰めた陰茎を押し付ける。彼女の後孔がそ
れによって歪み、強い抵抗を感じさせる。

雅美が苦しげな息を吐く。

宗方はその雅美の声に更に欲情を昂め、陰茎を強く押し付ける。

「あつ、痛いっ」

雅美の苦しげな息遣い声となった。それでも彼女は腰を引こうともせず健気に、教えられたと
おりに息を吐き、どうしてもこもってしまう尻の力を抜こうとする。

宗方が残酷な程に強く、彼女の後孔に陰茎を押しつける。そして今、自分が行っている行為を
更に楽しむ為に雅美に声を掛ける。

「どうだ、尻を犯される気分は？」

「痛い……」

「そうか」

宗方が欲情の笑みを浮かべ、更に腰を進める。

「うっ！」

雅美が苦痛の声を上げ、宗方は自分の亀頭が彼女の後孔の筋肉に包み込まれ、内部へと潜りこんでいく光景を見る。

亀頭の部分が挿入された後は、比較的楽に腰は進んだ。一気に宗方は雅美の中に陰茎を進める。

宗方は下腹部を雅美の尻の狭間に押し入れるようにして深く陰茎を挿入し、そして暫し動きを止める。

「尻を窄めるんだ」

宗方の言葉に雅美が従い、後孔に力を入れる。

宗方は強い筋肉の輪の圧力を味わい、その快楽によって陰茎が引きつるのを感じる。

「あつ、動いています……中で……」

雅美のその言葉に、宗方が更に気を昂じさせ、耐え切れずに腰を前後に振り始める。

「うっ……」

雅美が、その感触に声を上げ、先程指で内部をまさぐられた時よりももっと激しく身体を波打たせる。

「どうだ、腹の中を男のもので擦られる感触は？」

「変、とつても変……。ああ、おかしくなってしまうそう……」

「そうだ、もつとだ、もつと感じろ」

「うっ、うっ、うっ、うっ」

雅美が宗方の動きにつれて切れ切れの声を発し、首を左右に大きく振り、尻を犯される感触に翻弄されていく。

深く挿入されたときには腹の奥を突き上げられるように感じ、引かれる時には内臓が引きずり出されるような感覚に囚われる。

雅美が、宗方の腰の動きに合すように尻を前後に振り始める。

宗方は強い後孔の締め付けの中で、射精の衝動が芽生えるのを意識する。

雅美が半ば無意識に後孔の筋肉を窄め、生じたその苦痛にも似た快楽の中で、彼は激しく息をつく。

彼女の腹の内部の管が、亀頭の敏感な表面をこすり上げると、彼は腰を激しく振り、射精へと向かう。

激しい陰茎の動きに、雅美が苦痛の声を上げる。

「強い……ああ、強い」

その言葉に、宗方は身体の奥底が揺さぶられるような獣欲を感じる。

大きく振り上げられた手が、力を込めて彼女の尻房に打ち下ろされ、風呂場に甲高い音が響きわたる。繰り返されるその音に、彼女の悲鳴が交差し、尻の表面に浮いた汗と湯が飛び散る。

白い尻房に赤い手の形が刻印されていく。

雅美は尻を打たれる痛みを味わい、そしてその痛みによって欲情を覚える。意識の底に毎夜、寝室から聞えてきた彰子の快樂の悲鳴が蘇る。

宗方が、更に手を振り下ろす。今までよりも強い、痺れるような苦痛が彼女を襲い、そして雅美は再び彰子を思う。

「叩いて！ もっとお尻を叩いて！ 奥様のように私を、私を蹴って！」

雅美は、自分の欲望を言葉にする事で、初めてはつきりと自分の欲するものを自覚する。

宗方が連続して雅美の尻を強く打つ。その度に、彼を締め付けている後孔が更にその締め付けを増し、快樂を生む。

雅美の尻の肉が真っ赤に染まり、熱く火照る。太股は溢れだした愛液にまみれ、陰核は痛いほどに張り詰める。

宗方の射精への衝動が限界となる。

彼は雅美の尻を鷲掴みにし、表面が熱く火照るその肉を捻り上げながら、最後の強い突きを尻に加える。

雅美が、内臓を直接に突かれたような声を上げ、身体を前に押されて頬を洗場にこすりつけられる。その瞬間、宗方は雅美の腹の奥底に熱い白濁をしたたかに射精し、快樂の声を絞り出した。

雅美は、腹の奥で熱い飛沫を感じ、その瞬間に尿を漏らす。愛液と混ざり合い粘りをみせるそのしたたりは、太股を伝い落ち、洗場を汚し、下水口に流れこんでいく。

宗方は下腹に力を入れ、淫茎の中に残った白濁を彼女の腹に注ぎこんでから、陰茎を抜きさる。

雅美がぐったりとした身体を洗場に倒し、瞳を閉じる。細く、まだ幼さを残した背中が荒い息に上下し、陵辱された後孔の鈍い痛みを感じながら、叩かれつづけた尻が疼く苦痛に耐える。

宗方が湯船の縁に腰を下ろし、そんな彼女の尻の狭間から漏れだした、自分の白濁が、秘部から溢れ出した愛液と混ざり合って行くさまを見詰める。

「起きなさい」

宗方が命じる。

雅美が疲れ切った身体を起し、その際に後孔に痛みを感じたのか、顔をしかめる。

「痛いかい？」

雅美が肯く。

「すぐに馴れる」

雅美が再び肯く。

宗方が脚を開き、力を失った陰茎を雅美の前に晒す。

「洗ってくれ」

雅美は宗方の目を見詰め、そして三たび肯いた。

石鹸を手にまぶした雅美が、湯船の縁に腰を下ろす宗方ににじり寄り。手錠に繋がれた不自由な両手に陰茎を包み込む。

彼女は、宗方の下腹についた泡を洗い流してから、彼を上目使いに見詰め、そして更にすり寄って、開かれた脚の中に身体をすっぽり収める。

躊躇する事なく、雅美が目の前の陰茎を啜える。

宗方が、そんな彼女の頭に手を掛け、自分の下腹部に引き寄せる。深く彼女は陰茎を口に含み、いとおしいものであるかのように、舌で舐めはじめ。

宗方は快樂というよりも、雅美の行為に満足気な笑みを浮べた。

窓から昼の日光が差し込む風呂場の中で、宗方の陰茎に舌を這わせる雅美は、自分のこれからの運命が決定づけられた事を自覚する。

後孔の鈍い疼きはまだつづいていたが、それは既に不快なものではなく、宗方によって刻み込まれた「印」のように思えた。

雅美は、口の中の陰茎に舌を這わせつづける。

それが再び力を取り戻す事を期待しながら。



私は、亡き恩師、宗方の日記帳を閉じる。

窓に目をやると既に雨は上がっており、夕刻が迫っていた。

私は椅子から立ち上がる。

以下、次回へ